

ソニー創業者の井深大は、戦後日本が科学技術で復興するためには、理科教育こそ重要だと考えていました。井深は日本初のテープレコーダーやトランジスタラジオを発売し、会社経営がようやく軌道に乗り始めた1959年に、「ソニー小学校理科教育振興資金」の贈呈を始めました。

当時の贈呈式当日に、井深大から受賞校の先生方へ贈ったメッセージをご紹介します。

※内容および名称・肩書等は当時のものです。

第6回（1961年） ソニー小学校理科教育振興資金贈呈式

「身についた科学技術を」 井深大 ソニー株式会社社長（当時）

もてる国、しあわせならず

昭和36年度のソニー理科教育振興資金の贈呈式をここで行い得ることを、非常にうれしく思います。今年は、また新しく中学校も加わっていただきましたが、この企てが日本の科学技術のために、わたくしどもが予期していた以上に大きなお役に立っているということを考えるとき、非常に幸せに思っております。

わたくしはここ2カ月ほど海外へ旅行してきましたが、訪れた国々のなかで一番頭に残っているのはアイルランドとカナダです。わたくしどもはいままでカナダという国は富んだ国で、生活レベルはアメリカについて世界第2位、あんなうらやましい国はないと思っておりました。ところがオタワからモントリオールまでの自動車旅行でオンタリオの発電所をのぞくと、工場らしい工場はその道沿いには一つもありません。いったいカナダという国は「生産」はやっていない国なんだろうかとびっくりしました。うらやましがっていた国とはちがって、まったくかわいそうな国だということを発見したわけでありませぬ。

カナダには、1800万の人口しかありません。その上アメリカと境を接していて、なにかを作りだそうとしても、それよりも安い、いいものがアメリカからどんどん入ってきます。そこで、あれだけの大きな資源を持っているから、その資源を売って加工したものを買えばいいという結論がでてきます。ところが生活レベルが高いために非常に高度の加工品を買い入れなければいけない。昔は資源と引替に加工品を買ってもつじつまが合っていたんですが、だんだん天然資源と加工品との割合のバランスがくずれて、今日では非常に大きな赤字の国となっています。わたくしどもがうらやましいと思っていた資源を持てる国、人数の少ない国というのは、逆の効果がでてきているわけです。

日本はたくましい国である

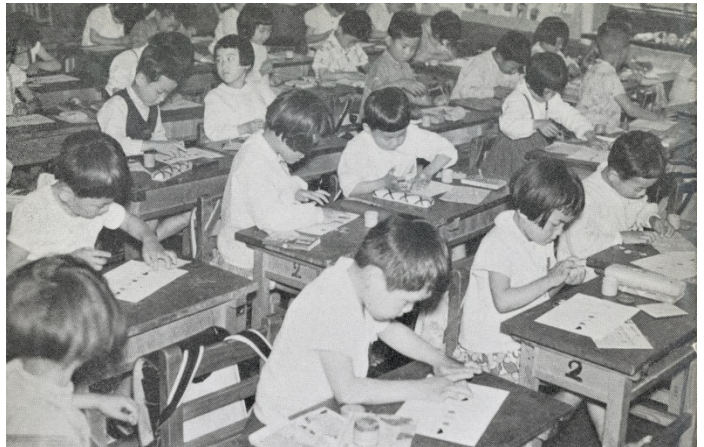
日本は昔から資源が無い国だ、人が多すぎてこんな困る国は無いということがいわれてきましたが、今度世界を回ってみて、日本みたいにいい国はない。とにかくこれだけの人口がいるんだから、ひとり

ひとりが買えば九千万台のラジオが売れるという大きなマーケットを持った国である。また、ものをこしらえる意欲とか技術についても事欠かない。日本ほどたくましい国はないのだと思って帰ってまいりました。

天然資源をどんどん輸入し、これを大いに加工して世界に売っていけば、日本みたいに強い国はないという確信を、わたくしは持っております。しかし、天然資源をかたちあるものにかえるためには非常にすぐれた科学・技術が必要です。

津々浦々に科学の灯を

わたくしどもが若いころは、不幸にして科学技術はそう徹底していませんでした。大東亜戦争の最中に「科学する心」というようなことで、だんだんそういう運動が始められてはきましたが、戦前は科学というものがなによりも必要なんだという考えはなかったと思います。このような体験から、わたくしは若い世代から科学というもの



「明日の理科教育のために 第6集（昭和36年12月発行）」より

を自分の身についたものとしていかなければならないんだということを、しみじみと考えております。

それにはやはり小・中学校の教育が一番大切です。身についた科学を小学校・中学校の子どもに植えつけるには、どうしても先生方のご努力にまつほかはないと思います。

ささやかな催しがきっかけとなって、科学の灯が津々浦々ととり、若い世代の人たちが科学を身につけ、科学が本当に生活に入り込んだときに、将来への日本の希望は非常に大きいものがあります。

このように科学技術の振興に日本の将来を託さなければならないときに、皆さまが科学教育の振興にお励みになり、きょう受賞されるということは、たんにソニー 1 社の問題ではなく、日本の科学レベルの向上、したがって日本の国力を増す一つの大きな原動力がここに潜んでいると信じます。

終わりにになりましたが、ここにご臨席の三先生^(※)には、この仕事を始めて以来、ずっと真剣に審査に打ち込んでいただいてまいりました。皆さまからいただいた論文を審査するという事は大変な仕事ですが、貴重な時間をお割きいただき、ご審査にあたってくださいました。受賞された皆さまといっしょに審査員の先生に心から感謝の意を表したいと思います。

※三先生： 当時の審査委員である茅誠司氏（東京大学学長）、篠原登氏（科学技術庁次官）、内藤誉三郎氏（文部省初等中等教育局長）のこと